信州大学人文学部における日本語教育

——日本語授業の実際——

金　子　泰　子

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　人文学部の留学生
Ⅲ　日本語授業とその受講生
Ⅳ　日本語授業の実際
　1．日本語授業（日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の目標と概略
　2．日本語Ⅰの実際
　3．日本語Ⅱの実際
　4．日本語Ⅲの実際
Ⅴ　日本語教育と国語教育
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

思いがけず，4月から，留学生の指導を担当することになった。私自身は国語教育の専攻で，短期大学で国文法や文章表現の指導に携ってきた。数年前から，短大にも中国からの留学生が毎年2人ずつ来ることになり，その指導を通じて日本語教育にかかわるようになっていたが，本格的に日本語教育に取り組んだのは今回が初めてである。

わずかな期間での経験ではあるが，国語教育で見ていた「国語」とは異なる「日本語」が，日本語教育からは見えてくる。この辺りのことも含めて，本稿では，信州大学人文学部における日本語教育の実情，とりわけ日本語授業の実際をご報告したい。

Ⅱ　人文学部の留学生

人文学部には，平成元年度10月30日現在，外国人留学生は18名在籍している。所属，学年，専攻（講座），性別，出身国，財源別の一覧は表1に示すとおりである。

現在，在籍中の11名の研究生のうち8名が大学院への進学希望者で，残り3名（＊印）が1年限りの研究生である。

日本語学習歴は，ほぼすべての留学生（注1）が各々の出身国で，日本の4年制大学に相当する大学の日本語学科を卒業しているが，その後については，卒業後間もなく信州大学に留学した学生の他，出身国内で何年か日本語教師を務めた学生，会社員として通訳，翻訳に携った学生，来日後，東京近辺の日本語学校に1年間通った学生など様々である。

表1　平成元年度　人文学部　留学生

所属・学年	専攻・講座	性別	出身国	財源別
大学院　2年	言語文化	女	台湾	私費
	言語文化	女	中国	私費
	言語文化	男	台湾	私費
1年	言語文化	男	韓国	私費
学部　4年	国語学	女	台湾	私費
3年	比較哲学	男	中国	私費
1年	(教養部生)	女	台湾	私費
研究生	国文学	女	中国	私費
	国文学	男	中国	国費 (平成元年9月他大学へ移籍)
	国語学	*女	中国	私費
	国語学	女	ブラジル	私費
	国語学	女	台湾	私費 (交流協会奨学生)
	国語学	男	台湾	私費 (交流協会奨学生)
	英文学	女	中国	私費
	国語学	女	台湾	私費
	国語学	女	韓国	私費
	国語学	*女	台湾	私費
	比較文学	女	西ドイツ	国費 (平成元年9月帰国)
	比較文学	女	ポーランド	国費 (平成元年10月来日)
	国文学	*女	フランス	国費 (平成元年10月来日)

日本語能力については，日本語学習歴の長短にかかわりなく，かなりの個人差が見うけられる。大学院で，日本人の学生と同様に，日本語で研究ができるレベルを上級の最終目標と考えるならば，上述の研究生の大部分は，中級の中程度から上級の初めに位置すると言えるだろうか。しかし，文法力，語彙力，読解力，聴解力，作文力等，領域別の能力差もあり，総合的な日本語能力の測定はかなり難しい問題である。

Ⅲ　日本語授業とその受講生

人文学部内に日本語の授業が開かれたのは，昭和62年10月からで，人文学部国語学講座所属の助手がこれに当っている。

現在のところ，単位取得の対象になる授業ではないが，留学生からの希望は非常に強く，日本語に不自由を感じる留学生の学生生活をよりスムーズに行わせるという意味においても，日本語の授業は今後ともより充実されることが望ましいと考える。

現在（平成元年度4月以降）開講中の日本語授業は，日本語Ⅰ，日本語Ⅱ，日本語Ⅲの3こまで，各々，週1回90分の授業である。

授業内容は，学年始めに，入学間もない研究生たちの希望を聞きつつ，各々の研究生の指導教官とも相談のうえ，決定したものである。その後，学習者の時々の要求や，また日本語の能力に合わせて，適宜，教材や授業方法なども変更するが，それらについてはⅣで詳しく述べるつもりである。

受講生は，主に研究生の11名であるが，学部生，院生も受講可能である。

また，日本語教育に興味を持つ日本人学生にも参加を呼びかけて，自由に受講してもらい，手伝いもしてもらっている。

Ⅳ　日本語授業の実際

1　日本語授業（日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）の目標と概略

㋐　日本語Ⅰ

日本語の学習歴の長さからも分るように，日常会話に困る学生はいない。また，会話力そのものは，日本での学生生活の中で，徐々に身につけられるものであろう。そこで，日本語Ⅰは，文章表現力（作文力）の伸長を目標に掲げている。

日本語を母語とする者でさえ，作文は苦手なものである。苦手というよりも，聞く・話す・読むという他のことばの領域に比べて，主体的な姿勢を強く要求する，労苦を伴うものである故に，書く機会が絶対的に少ない結果と言えるだろう。まして，外国人である。少ない語彙及び文型を駆使しての作文には予想以上の抵抗がある。

しかし，学生生活において，しかも，それが大学院での研究生活ともなれば，論文の作成を筆頭に，レポート，研究発表資料など，文章表現力は不可欠の要素である。書くことへの抵抗感を，最少限に抑える工夫を重ねると同時に，他のことばの領域（読む・聞く・話す）とも関連を図りつつ指導を進めるべきであろう。

作文には，書き手の総合的な言語能力が如実に現れる。学習者の日本語能力を正確に把握し，また伸長させるためにも，文章表現指導は非常に重要な意味を持つものであると考える。

㋑　日本語Ⅱ

ことばは，その国の文化，習慣と密接に結びつくものである。それらを理解してはじめて，適切な言語表現が可能だと言えよう。その意味では，日本に来て，日本の文化・習慣の中で日本語を学ぶ留学生たちは，非常に恵まれた環境に居ると言える。

とはいえ，この利点も，留学生が単に，自らの国の文化・習慣との違いを指摘し，その良し悪しを安易に決定するというだけでは，発展的に生かされているとは言えまい。世界各国からの留学生が集まる日本語クラスのメリットを最大限に利用したい。自らの国の文化の再認識を行うとともに，互いに許容し，受容しあう姿勢をも育みたいと思う。

授業では，自然な日本語の文章に幅広く接することを目標に，教材は新聞・雑誌をはじめとして，活字化されて日本国内で一般に広く流布するものから選ぶようにしている。文型・語彙ともに限られた範囲でかかれたテキストの日本文に慣れている学習者には，当初難しさもあるようだが，文型・語彙の拡大とともに，日本事情理解への手がかりとしても役立たせたいと願っている。

この授業には，日本人学生にも参加を呼びかけ，留学生からの種々の質問に応じてもらうようにしている。日本語教師は，常に留学生と交わるという生活を過ごしている関係で，往々にして，一般的な日本での考え方を見失い勝ちである。何が一般的であるかの論議は抜きにしても，独断や偏見を極力避けるためには，日本語教師以外の日本人学生の参加は，非常に有効であると思う。また，流行語や，若い世代での物の考え方などの紹介でも，大いに役立ってくれるものである。

一方，日本人学生にとっても，日本語クラスへの参加は，普段は何気なく，無意識のうちに用いている日本語を，意識的に考える良い機会でもあるようだ。

日本語教師のひとりよがりを防ぐためにも，留学生からの疑問点に，より広く深く答えるためにも，日本人学生の参加は今後も積極的に続けたいと思っている。

㋒ 日本語Ⅲ

文語文法の学習である。現代日本語だけでなく，日本の古典をよりよく理解するために文語文法の学習もしたいという留学生からの希望をうけて開講した。

留学生との古文の学習は，予想していなかったことなので幾分当惑しつつ，これといった指導方針を立てる間もなく，様子をみながらの態勢で始まった。が，始めてみると，そんな私の姿が，かえって留学生たちの文語文法への抵抗感を和らげるのに役立ったようでもあった。

指導者も一緒になって古語辞典を引く。各々の古語辞典及び参考図書の解説を紹介し合いながら，少しずつ理解を深める。現代語とは全く異なる意味内容のことばや，現代では用いられないことばの中からも，現代語に通じる歴史的変化を共にみつけ出す機会が何度もあった。とりわけ，台湾からの留学生の文語文法の知識の豊かさには驚かされた。彼らは，その文法知識を駆使して文語文を読み解き，語構成を正確に理解する。文法に照らして読み進むという外国語学習に共通するその姿勢から考えてみれば，日本人が文語に対して示すほどの抵抗は，かえって外国人の彼らにはないのかもしれないという気すらする。

いずれにせよ，日本で，日本人教師とともに，古典作品を読み解く快さを，彼らは彼らなりの満ち足りた表情で示してくれる。欧米の学習者は，東洋の古典作品への憧憬と興味を持って，一方，中国・台湾の学習者は，はるか古の日本との関わりを古典作品の中に発見する楽しみを持ちながら。

現在の日本語教育の中で，文語の学習を報告したものは，浅学にしてまだ目にしていないが，指導者側からも非常に興味深いものであると言える。中級から上級レベルでの学習になるであろうが，少なくとも人文学部系の留学生に対しては，実用本位の日本語習得の側面を離れた，このような文語の学習が広がってもいいのではないかと思う。文語を学ぶことは，日本語そのものに加えて，日本の歴史と同時に，現代に続く日本の文化・習慣の深い理解へとつながるものであると確信する。

2　日本語Ⅰの実際

クラス内で発言の多い学生は，日本語の能力が高いと思われ勝ちであるが，一概にそう断言できるものではない。寡黙な学生が，間違いのほとんどない作文を提出するのに出会うこ

とも多い。そういう学生に注意していると，言葉数は少なくとも，やはり，正確な物言いであることに気付く。発言回数の多い目立つ留学生の日本語能力を評価しがちであるが，正確な表現能力を確認するには，やはり文章表現力を見ることが必要であろう。また指導者側の評価の面だけでなく，留学生自身が，自らの日本語能力を客観的に評価し，意識的にその改善と伸長を図るためにも，文字化による表現は重要な意味を持つものである。

筆者はここ9年間，女子短期大学で「文章表現指導」を続けている。いわゆる国語教育での文章表現指導と，日本語教育でのそれについての気づきをいくつか述べたい。

使用言語を意識的かつ客観的に認識するという意味においての文章表現上の利点は，日本人の場合も全く同様だと思われるが，その指導と学習の過程は大きく異なるものである。

結論から述べるとすれば，日本人の場合は書く回数を増やせば増やすほど，程度の差はあれ，必ず文章表現力は伸長するが，外国人学習者の場合は，そうはいかないというものである。

課題の有無，文章の種類や長さなど，条件によって出来が異なるのは当然ではあるが，しかし，日本人（日本語を母語とする）の場合は，最少限のアドバイスで，あとは帰納的に自学自習が可能である。学習期間の長さと習得語彙の量から考えても，それは当然のことで，要は，話す・聞く・読む場合に無意識的に行っている言語活動を，書くという主体的・意識的状況下で，言語を慎重に選び，さらにそれらを効果的に組み合わせる経験を増やせばよいのである。生まれ育った国で，ほぼ完全に身につけた理解語彙を，書くことを通して，表現語彙として定着させる過程である。様々な機会と目的をとらえて，書く回数を増やせば増やすほどその効果は大きい。

一方，外国語としての日本語学習者の場合，理解（学習）語彙がそのまま表現語彙である。とりわけ初級レベルでは，数少ない学習語彙を駆使して，どうにか相手に理解してもらえる文を作るという段階から出発する。より効果的に，上手にという日本人学習者への指導法とは全く異なる状況が現存する。

このような，外国語教育としての実情をまずはっきりと認識することから，日本語教育での文章表現指導は出発するといえる。指導者は，学習者は学習範囲内での，しかも完全に理解したものでしか表現できないのだということをはっきり認識しなければならない。話す場合には，相づちや反問などを用いて，聞き手がかなりの程度表現の手助けを行うが，書き言葉では，すべて学習者自身の学力によるほかない。話し言葉では，相手の質問等によって軌道修正される誤りが，書き言葉ではその誤りが幾重にも重なって，とんでもない（言わんとすることとはかけ離れた）内容が出来上がることも間々ある。

独善的に，中級はこれくらい，上級なのだからもう少しましなものが書けるだろう，などという思い込みは禁物である。学習者とともに，生活全般，及び，他の日本語クラスでの学習事項との関連をはかりながら，徐々に，根気よく文章表現能力を引き上げて行く必要がある。

前期での作文タイトルの一覧は次の表2の通りである。大多数が来日間もない留学生であることを考慮して，まず身の回りの（生活の中の）語彙の拡充を図りながら，とにかく気楽に，書くことに慣れさせることから始めた。指導者としては，この間に学習者の日本語力（文章表現力）を評価し，今後の指導に役立たせたいという意図もあった。

散歩に出て，大学の近辺にある建物や樹木，季節の花などの名称を確認した。各自のアパートから大学までの道順を，方角や目印を正確に示して説明する練習もした。スーパーマーケットでは，野菜や調味料を手に取り，においをかぎながら，その名前を覚えた。料理の本を使って調理法や包丁での切り方などの語彙も覚えた。

1人暮らしを始めた留学生の回りは，出身国内で，テキストを片手に日本語を学習していた頃とは較べものにならない，まさに日本語の大洪水である。2，3か月も経てば，学内外の様子もわかり，学内での行動及びその他生活一般にも落着きが見えてくる。

表2　日本語Ⅰ　作文タイトル一覧
（平成元年度前期）

① 私の楽しみ
② 小さな自慢
③ 大学から自宅への道順説明
④ 私の大好物（料理法紹介）
⑤ 「ウズラの鳴き声」（文型挿入練習）
⑥ 最近強く心に残ったこと
⑦ 手紙文（恩師・恩人への近況報告）
⑧ 病気になった時のこと
⑨ 日本に来て○か月，私の日本人観
⑩ 夏休みの抱負

日本での生活に慣れる（日本語を用いて不自由なく生活が送れる）ということと，生活の中で不自由なく使えるようになった日本語は，正確に日本語の表記法に従って書けるということを同時進行させたいと思う。

縦書き・横書きの表記の違い，句読点の打ち方，数字の表記，文体の特徴など，なるべく初期のうちに正しく身につけさせるようにしたい。留学生生活に不可欠な，手紙文の型式やある程度の敬語の指導なども，なるべく早い時期に行いたい。

小さな誤りを適当に残してしまうと，結局いつまでたっても，正しい日本語の表記ができずに終ってしまう。初期の内でのこのような基本的事項の教授は，指導者に大きな責任のあるところであろう。

「何でも自由に書きましょう」というほど書きづらいものはない。これでは，日本人ですら困ってしまう。語彙の少なさに加えて，文法力も弱い留学生ではなおさらである。しかし，1文レベルでは，いつまでも初級の域を脱することはできない。このような時に便利なのが，あるひとまとまりの文章を文型として丸ごと利用することである。日本語の文章の型をそのまま真似るのである。内容は自分に合わせてよい。

文型として提示した文章と学生の作文例（注2）は以下の通りである。

文型

わたしは，感覚に訴えかけてくる擬音語・擬態語が好きで，よく研究対象に選ぶ。とりわけ，古い時代の擬音語・擬態語の探索は，楽しい。そこには，われわれ現代人の想像もしないようなユニークな言葉があふれ，新鮮な感動を覚えることが多いからである。

山口仲美　「ウズラの鳴き声」月刊「言語」1989. 6月号　2頁

作文例

- わたしは，音楽が好きで，よくひとりでレコードを聞く。とりわけクラシック音楽を聞くことは楽しい。そこには，現代音楽にはない，クラシック音楽独特の安らぎがあるからである。　（中国）
- わたしは，お酒を飲むことが好きで，よく友達とお酒を飲みます。とりわけ，日本人と一緒に飲むのが楽しい。そこには，日本語会話の楽しみがあるからです。　（台湾）

- わたしは，ミルクティーを飲むのが好きで，よくあつあつのミルクティーを飲む。とりわけ，家族と一緒におしゃべりをしながら，ミルクティーを飲むのは楽しい。そこには，ミルクティーと同じように温かい，スイートな感情の交流があるからである。（台湾）
- わたしは，歌を歌うのがすきで，よく歌う。とりわけ，少数民族の歌を習うのは楽しい。そこには，我々漢民族の想像もしないような，少数民族独特の人情，風俗などがあふれ，新鮮な感動を覚えることが多いからである。（中国）
- わたしは，国際関係について考えることが好きで，よく外国の方といろいろな主題について討論する。とりわけ，それぞれの相手の国の言葉で話せるのは楽しい。そこには，相手の文化や考え方を根本から理解する楽しみがあるからである。（西ドイツ）

短い文章ではあるが，書き手の言わんとする事柄は十分に盛り込まれていよう。例文を見ても分るように，全く同じ文型であるにもかかわらず，異なる内容が，正確に表現されている。文章表現力の弱い学生には，このような文型をいくつか用意しておくのは，非常に有効である。

書く活動を，長期的に続けて行こうとする時に，指導者側も学習者側も，ともに頭を悩ますことは「書くべき事柄を探す」ということである。必要性のない文章は，文字通り「書く必要のない文章」であり，つまりは書く意欲につながらないものである。とりわけ，主体性の要求される「書く行為」の場合，単に宿題だから，課題だからの強制観念だけでは書けるものではない。作文行為は表現伝達行為でもある。自らの内的な意欲が結実して伝達内容が形成され，それを効果的に伝達するために，文章構成上の工夫がなされるのである。

書き上げられた文章は，次に，読み手に渡り理解されなければならない。表現が正確に伝達され理解されたという事実が，次回への表現意欲につながる。提出された作文は，他の留学生や日本人学生にも公表したいし，できれば，その留学生を取りまくすべての人の目にふれるように配慮したい。

日頃は，日本語での表現に何かと不自由を感じている留学生たちである。書いたものを通して，本人の考えを発表する機会を多くしたいと思う。人文学部内で発行している留学生通信「たけのこ」（注３）は，筆者のこのような考えを反映したものである。

留学生の文章が，読者の間での１つの話題源となり，日本語のクラスを越えて会話が広がるような状況が理想である。教師１人の力には限界があるが，留学生を囲むすべての人々がすばらしい日本語の教師であることを知っていただきたい。

ことばが不自由であるというだけで，留学生を子供あつかいしてしまうようなことはないだろうか。日本人の同年代の人に対しては考えられないような対応をしている場合がある。意志が疎通せず，誤解や偏見につながることもよくあることである。

自分の意見を発表し，受容される喜びを感じることは，言語を操る人間の本源的な欲求であろう。留学生１人１人の人格を認め，日本語学習の中でも，絶えず充足感の得られるそのような日本語教育，とりわけ文章表現指導でありたいと願っている。

学習が進むに従い，かなり長い文章を書く学生が増えてくる。ところが，個々の使用語句や文法上の誤りはそれ程でもないのに，どうも理解しづらいという文章が多い。文単位ではなく，文章レベルでの構成上の問題があるようである。

日本人が文章を書く場合に経験する，思考をまとめる，あるいはまた，新しいアイデアを創造するという意味での文章表現上のメリットを日本語学習者に求める必要はないだろう。

ほぼ完全なるバイリンガルで，日本語で思考する学習者（この場合は，すでに学習者とは言えないであろうが）を除いて，ほとんどの場合，彼ら自身の母語でその過程を経た上で，日本語表現への変換が行われていると考えられる。この場合，母語による思考力，表現力が，結果的に日本語で表現されたものに大きく影響を及ぼしていると言える。つまり，学習者が母語での文章表現能力をどの程度有しているかという問題である。

論理の飛躍や矛盾など，いわゆる論理性の欠如について，日本語以前の，学習者の思考能力にまで立ち戻らなければならないとすると，日本語教師の仕事はかなり大変である。

とぼしい経験からではあるが，指導した留学生の場合を考えてみると，初等教育レベルから，レポートを書く訓練，あるいは口頭で他人に説明したり，他人を納得させる訓練を受けているとみられる欧米系の留学生の書いた文章は，小さな誤り（漢字や文法上の間違い）は多くとも，作品全体としての要旨は非常に明快で，理解しやすいものが多い。何より，事実と意見とがはっきりと区別できるというのも，欧米系の学習者にきわだった特徴である。

この点については，国語教育でも問題になるが，主観と客観とをしっかり認識することは，読み手に正確に理解してもらうことを目的とする文章表現においては，非常に大切な点である。客観的な事実に基づいてこそ明快な論理が展開する。

日本語学習者の場合，周到な日本語表現ができない以上，より以上に論理性が要求されるとも言えよう。

留学生の国での国語教育の実情や問題点が分れば，日本語での文章表現上にみられる問題点の原因が理解できるかもしれない。しかし，母語での国語教育でし残してきたものを日本語教育の中でやり直すことは，かなりの時間と労力を要するものである。

筆者の受けもつ留学生の中でも，中国からの学生，とりわけ文化大革命期に教育を中断された学生は，勉学への熱意と情熱においては並々ならぬものがみうけられるものの，やはり基本的な学習法が身に付いておらず，自己流で無駄の多さが目立ち，気の毒に思うことがある。

文章表現も，文法上の誤りや語彙の不足以前に，あまりに主観に傾き，客観的事実で裏づけながら読み手を納得させて行く書き方ができない。このような，文章表現への認識不足は，結果として，文体の混合，論理性の欠如につながり，非常に読みづらい文章となる。自国での教育の実情が，日本語学習に大きく反映している一例と言えよう。

時間と経験不足で，作品を例に実証づける段階には到っていないが，興味深い問題点として残しておきたいと思っている。

参考までに，留学生の作品をいくつか例示する。

私の楽しみ　　韓国

日本に来て一番困ったことは，時間的な余裕のないことです。すぐやめるつもりなんですけれどもアルバイトもやっているし，家事もあるし，また，私に一番大事な勉強もあります。こんないろいろのことをやらなければなりませんので，自分自身を考える時間がありません。自分自身を忘れて生きて行くことに気付いた時は，とても悲しくなります。このため，私の楽しみは，学校に来て，毎日ではありませんけれども，授業のあいた時，一人で散歩をしながら，自分自身を深く考えることです。

最近強く心に残ったこと　　台湾

この間，北京の天安門広場で，中国の学生達が民主化を促進するために，デモを行った。私は北京に行って一緒にデモに参加することはできないけれども，同じ中国人として，この学生運動を支持す

るために，張君を始め，他のクラスメートと一緒に松本の駅前で募金活動をした。北京の学生運動の激しさ，偉大さに比べて，私達の募金活動は口にするに足りないものだが，募金活動をしながら私はなんとなくまるで乞食のように思われてならなかった。どういうわけで，今日の中国の青年達は，海外でまで中国の民主化運動のために募金するのだろうか。考えながら自分の国の力の微弱さが恥ずかしくなってきた。中国の政府の腐敗に恨みをいだいた。

手紙文　　ブラジル

さわやかな初夏の季節になりましたが，その後，皆様はお変わりもなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。

あっという間に，松本でもう二か月間，過ごしています。私は勉強しながら，週に四回，午後6時から11時まで中華料理屋さんでアルバイトをしています。レストランはそんなに大きくないのでだいたい二人か三人のウエイトレスでやっています。コックさん達は親切で，いつも大盛りに食べさせてくださるので，少しふとりました。それで，最近はあまり食べすぎないようにしています。元気でやっていますからご安心下さい。

勉強が一番大切なので，一か月の生活費分だけ働いています。月曜日から土曜日まで授業があります。……中略……

なかなか難しい科目ばかりなので，漢字の方も不自由だし，少し苦労しています。少し大変ですが，頑張ります。

たぶん，今週か来週，ビザを延長するために，そちらへ参ります。急いで行きますので，皆様と残念ながら，お目にかかれないかと思いますが，電話を致します。

これから，だんだん暑い日もございますので，皆様，お体にお気をつけください。

末筆ながら，奥様はじめご家族の皆様によろしくとお伝えくださいませ。

平成元年6月5日

○○○○○（署名）

鈴木先生

日本に来て九か月　私の日本人観　　西ドイツ

来日してから，日本人と友達になるために努力してきた。ドイツの人々は友情というものを大切にしているからである。誰にも話せないことや心の奥の深い感動についても，親友とならば相談することができる。個人的な問題の場合にも親友にならよく理解してもらうことがある。しかし，日本人のお互いの関係は全く違う。自分のことや気持は恥かしくてあまり伝えない。感情を表現することも遠慮している。

日本人の個人的なつながりは弱いが，グループ内でのつながりは強い。グループのメンバーとしてなら安心できるようだ。個人的な発議はあまり起こさないし，責任を自覚している人も少ない。よく先輩の助言を頼む。一方では，それはいい習慣だと思う。が，もし，先輩が悪い事をした場合，後輩から批判を受けることはあまりない。だから，後輩もよく先輩の間違いを繰返す。リクルート事件を見ると，上に述べたことはすぐ分ると思う。

もちろん，特に悪いことをしていない人々は多い。しかし，無視している人が多過ぎると思う。子供の時のこのような態度はまだ許されるが，大人に対してそれは絶対に許されないことだと思う。「日本人は成人になりたがらない」そのような感じを受ける。

滞在中に，日本人の親友ができなかったことと，日本人は，自分に直接関係ないことに対しては無責任で，あまり関心を寄せない（中国の事件についての日本の政府の対応など）ということが分って，私は大変失望した。

夏休みの抱負　　中国

夏休みがくるところで，長い休みに何をするか考えると，いろいろなことをやりたい。旅行もしたいし，帰国もしたい。勉強もしたいし，水泳も習いたいが，その中で一番重要なことは，やはり勉強だ。英米文学の専攻なので，英語の論文を書かなければいけない。論文を書くことは当然時間がかかるが，日本語の勉強もするつもりだ。日本に来て二年経って，日本語がまだまだよくできないので，とても恥かしい。自分の努力が足りないと思うが，日本人と一緒にいて話すとき，とても緊張する。なぜなら，自分の日本語が下手なので，日本人と話したら，相手に理解されないので，恥かしくて話すのはもう止めたほうがいいと思う。だから日本人と一緒の時は，大体私は静かにして，相手の話を聞くだけである。これでは悪循環だ。練習しなくてはうまくなれない。だからこの夏休み中，自分でも勉強すると同時に，勇気を出して日本人の友達とも日本語で話すつもりだ。多分，後期に先生に会う時は，日本語がうまくなっていると思う。大きな抱負は無いけれども，日本語が早く流暢に話せるようになりたいという抱負だけは持っている。自分の抱負を実現するために，この夏休みは頑張りたい。

3　日本語Ⅱ

日本語Ⅰを表現領域の学習とするならば，Ⅱは理解領域のそれである。日本語で表現された情報をどのように深く確かに理解するか。

ある言語の体系は，その国が歴史的，社会的に培ってきた生活体系そのものを反映していると言える。つまり，ある一つの言語による表現を理解するためには，その国の歴史・社会を理解しなければならないということになるだろう。この場合，学習者は，自らの出身国の歴史や社会との比較対照を通して理解をすすめるであろうことは当然のこととして考えられるのであるが，そこに問題が生じることが多い。それが効果的に働く場合もあれば，逆に，理解を妨げる干渉となって現れることもあるからである。しかしながら，この辺の学習者個々の内部事情は，実際に，教材である本文の文脈の中で，互いに意見を出し合い，話し合いを進めるなかで初めて表面化してくるというのが実情である。

学習者，指導者双方の側の思い込み（理解したはず）を正すためにも，学習者参加の積極的なクラス運営が必要である。

留学生は，他の一般日本人学生と同様に，各々の専門分野に関わる講義を受講してはいるが，ことばのハンディに加えて，研究生という立場上，単位取得の義務もなく，どうしても受身の姿勢での講義聴講となる。そこで，日本語Ⅱでは，積極的な授業参加と，より深い内容理解を目標に，演習方式でクラスを運営している。

大部分が20代後半の留学生である。出身国内では教師をしていた人もいる。各々に責任を持たせることは，大きな自信につながると同時に，自己実現という側面から考えても，うっ屈した状態に陥りがちな留学生活での大きな心理的解放にもつながるようだ。これは担当者の生き生きした表情で十分に推測がつく。

演習を通して，大学院進学後の基本的な学習技能，つまり，人前での発表の仕方，参考文献の利用法，配布資料の作り方などを総合的に学習し，身に付けさせたいとも願っている。

新聞，雑誌などのコラムの中から，演習の担当者が興味を持ったものを選び出し，クラス内での講読と話し合いの材料とする。語釈，文法解説，調査参考事項など，担当者が配布資料として準備する。一こま90分に２人の担当者を決め，質疑応答，話し合いの時間を加えて，

1人45分の持ち時間とする。

日本語Ⅰとのかねあいもあり，多読による語彙拡大を目指してはいるが，担当者の選んだ文章が長めのものが多く，準備不足もあって，発表時間内に終了せず，未消化のまま終ることもあった。演習形式での授業の場合，指導者の事前指導が成功のカギをにぎることになる。何でも自由に読みこなせるようになることが理想ではあるが，学習者の実力に見合った教材を選定させるのが，指導者の重要な役割であろう。参考になるような例文をいくつか紹介するようなことも必要だろう。しかし，最後の決定権は，あくまで発表者である本人に任せたい。以後の下調べや発表方法などへの意欲を失わないためにもである。担当をきっかけに，日本文を広く読む姿勢が身に付けばと願っている。

実例1　韓国留学生の場合

本文　信濃毎日新聞1989. 6. 15

今日もカイシャで「ＯＬの呼ばれ方」

オフィスでのＯＬの呼ばれ方にはいくつかのパターンがある。

勤めていたころ，私は名字の「クン付け」で上司や先輩から呼ばれることが多かった。

しかし，私の周囲のＯＬたちによれば，これは珍しいケースらしい。「モリケン時代の青春ドラマみたいでダサい.／」と笑われてしまったりした。

では，彼女たちの呼ばれ方はどうなのか。日ごろの取材から，多い順に挙げてみる。

「島村さん」「島村ちゃん」「麻里ちゃん」「おねーさん」「オバサン」

もちろん，後の二つはぐっと数が減る。が，遠くから呼びかける時に，社内に限ってではあるが「オバサーン」と言われて憤慨した経験を持つコは，けっこういる。

「むこうも冗談なのはわかっているけど，二度三度続くとムッとする」（商社ほか）「『おねーさん，コピーとって』なんて，私はウエートレスじゃないんだから.／」（不動産ほか）

「ちゃん付け」も意外と評判が悪い。

「軽ノリの人ほど，名字にチャン付けを好む。それが親しさの表れだと勘違いしてるのね」（アパレル，広告代理店ほか）

もっとも，別のＯＬに言わせると，この「名字にちゃん付け」は，「『レイコちゃん』とか，名前にちゃん付けするのはいまイチ恥ずかしいから。照れ隠しのつもりなの」（信託銀行）ってことらしいが……。

ＯＬの場合，オトコと違って同期入社同士では，それぞれ別個の呼び名やニックネームを使い合っていることが多い。そこではたとえば「おトラ」とか「どど」とか，学生時代からのアダ名も，むしろ好んで生き残らせたりしているのだが，いったん「同期の輪」の外に出れば，それはオフィシャルな人間関係。だから，「ちゃん付け」の有無一つにも，けっこうこだわってしまうのだと彼女たちは言う。

「だから，ヘンにウケを狙わず，シンプルに「○○さん」。これがいちばん良い。ブナンなんですよ」

だが，もう一つ。ＯＬたちが目のカタキにしている呼ばれ方がある。それは，「お嬢さん」。次回はこれについて――。　（島村麻理・フリーライター）

語　釈

◦パターン(pattern)：型，類

◦上司：官公庁や会社でその人より階級の上の人

◦くん（君）：同輩または目下の人の名前にそえる軽い敬称。

◦ケース(case)：場合
◦ドラマ(drama)
◦ダサい（多彩）：①色彩が多くて美しいさま
　　②種々さまざまあってみごとなさま
◦ムッと：急におこって物をいわないさま，心の中で腹を立てるさま

◦照れ隠し：はずかしさ，気まずさを人前でごまかし隠そうとすること
◦アダ名：親しみや軽蔑（けいべつ）から本名とは別にその人の特徴などをとらえてつけた名
◦ちゃん：（さんの転）おもに人名につけて，親しんで呼ぶときにつける語
◦さん：人の名前や職業名などにそえる敬語様の変化したもので「様」より敬意の程度が低い。
◦おじょうさま：①主家や他人の娘を敬っていう語
　　②若い未婚の女に対して呼びかけることば
　　③世の中の苦労を知らずに育った女

オフィス，パターン，コピー，ウェートレス，アパレル，ニックネーム，オフィシャル，シンプルなど，外来カタカナ語が目白押しである。留学生には，かなりやっかいな問題である。

辞書に出ていないうえに，本来の言語が何であるのか，綴りもカタカナ表記されていては，見当もつかない。しかも，この文章の中には，本来日本語であり，普通には，ひらがなまたは漢字で表記されることばが，意識的に（であろう）カタカナ表記されているものがある。流行語，和製英語その他も混ざり合って，かなりやっかいである。（「クン付け」「モリケン時代」「ダサい」「オバサン」「オバサーン」「コ」「チャン付け」「レイコちゃん」「いまイチ」「オトコ」「おトラ」「アダ名」「ヘンに」「ウケ」「ブナン」「カタキ」「フリーライター」）

書き手の意識の違いもあろうが，これだけ頻繁にカタカナを使用されると，普段何気なく，我々日本人が用いているカタカナ語というものについて，考えざるを得なくなる。指導者も，参加していた日本人学生も，そして当然のことながら，この文章を選んだ学生自身も，当初の予想をはるかに越えた日本語の厄介さを実感した。

また，呼びかけ方一つにしても，場面，状況で様々に受け取られることも，日本語学習者には困った問題であろう。日本人学生の協力を得て，様々な場面での使い分けなど，クラスで話し合いがはずんだ。留学生自身が呼びかけられた場合の例や，逆に，呼びかける立場での問題点なども，具体的に，その場その場の様子をくわしく確かめた上で，皆で話し合いを進めた。

また，この韓国からの留学生の場合，偶然ではあるが，非常に興味深い問題が浮かび上がってきた。それは，語釈を付けるために本文から取り出した「ダサい」ということばに「多彩」という漢字を当てたことである。

韓国語を母語とする日本語学習者にとって，難しい日本語の発音の中に「語頭の有声破裂音」の問題がある。日本語では，無声破裂音 /p, t, k/ は有声破裂音 /b, d, g/ と音素的に対立をなしているので，語頭の有声破裂音を無声破裂音で発音すると，意味が全く変わってしまう特徴がある。が，韓国語では，この有声・無声の対立がないために，無声音が有声音に変わることがあり，担当者のこのような間違いは，必然的に起こるべくして起こったと考えられる。

日本語の音声として体系的に学習し，対照言語学的な方面からの指導も受けてきているはずだが，やはり，無意識のうちに誤りを犯してしまうようである。今回のような経験を通して，より意識的に，自らの問題点を解決していくことを期待している。

実例2　台湾留学生の場合

本文　朝日新聞　1989. 6. 1

ことばと暮らす

お愛想なの？　それとも本心？　　外山滋比古・昭和女子大教授

ある外国人の話。日本に長くいて言葉に不自由はない。日本人の知り合いからもらった転居の知らせの終わりに「近くへおいでのおりには，ぜひお立ち寄りください」とある。

しばらくして，たまたまその近くまで行く用ができた。いい機会だから帰りに訪ねてみようと思って，電話で都合をきく。出てきた奥さんらしい人の調子で，ひどく驚いている様子がわかった。なぜ慌てるのか，わからないまま訪問したけれども，どうも歓迎されている感じではない。そこそこに引きあげてきて，あとで友人に，どうしてだろう，ときいてみた。

そういう言葉は，いわばお愛想。いい加減なことを言っているわけではないが，額面どおりに受け取らないのが常識である。日本人はよほどの用でもないかぎり，訪ねていかない……そう教えられて，この外国人はびっくりした。

日本に定住した中国残留孤児が，親しくなった日本人から「お遊びにおいでください」と言われて，ぶらりと出かけていったところ，何しに来たのかといった顔をされてショックを受けた。心にもないことは言ってもらいたくない。いつかテレビでそう訴えていた。こういうときの言葉の微妙さは，同じ文化の中の人間でないとわかりにくい。

昼になって帰りかける客に，お茶づけでもどうかと主人が勧める。客が真に受けてその気になり，主人側が大あわてするという京の茶づけは，落語にも出てくる。お愛想か，本心かを見きわめるのは実際には，なかなかやっかいである。

寄付を頼みに行った人が「考えときましょう」と言われ，数日後に「もうお考えいただけましたでしょうか」と問い合わせて，笑われた。えん曲なノーだったのである。

ノーならノーと言ったらどうだ。理屈はそうだが，それではあまりに殺風景だと感じるのが心やさしき？日本人か。

語　釈

1．愛想（あいそ）…客に心からサービスしようとする，応対の仕方や顔つき。例…愛想がいい。

2．たまたま…ちょうどその時（偶然に）。例…たまたま私は居合わせて事件を目撃した。

3．そこそこ…十分に・（ゆっくりと）……する暇もなく……。例…食事もそこそこに（して）出かける……をするかしないかのうちに（取り急いで）。例…あいさつもそこそこに立ち去る。

4．いい加減…一貫性や明確さを欠いていて，それに接する者に，うそ・ごまかし・でまかせ・行きあたりばったりだという印象を与える様子。例…いい加減な〔中途半端〕な仕事。

5．額面…文字通りに受け取ってはならない，述べられた表面上の意味。

7．漬け…つけ（たもの）［狭義では，漬け物の名に添える］。例…一夜づけ・みそづけ・氷づけ

「お愛想か本心か」の問題。本心の場合は何ら問題はないのだが，筆者の経験から考えても，寄って欲しいと特に望む訳でもない人，どちらかというとそれを避けたい人に対しても，文面では全く同じ表現が使われているようである。こういうところが，やはり日本的な考え方，やさしさというのだろうか。しかし，逆に，留学生の立場からしてみれば，「ノーならノーと言ったらどうだ」「心にもないことは言ってもらいたくない」という結果になるのだ

ろう。自分が留学生の身になって，外国で暮らす場合を考えてみれば，確かにそうだろう。苦労して理解したそのことばの意味が，その意味以外の意味，というより，まるで逆の意味を持つものであるとすれば，それは，かなり厳しい現実と言わねばなるまい。

筆者は，ことばそのものの意味を大切にしたいと思っている。ことばは心を正確に運ぶべきものだ。相手が，日本人であろうと外国人であろうと，同じ立場を取るつもりである。ことばを通して本当のやさしさを伝えたい。日本語を，広く世界に普及させる立場からも重要な認識であろうと思う。

ワープロを使いこなせる学生で，本文，語釈ともにワープロで打って資料を作ってきた。日本語Ⅰでの作文もワープロで打って提出している。この学生の場合，直筆での文字・表記に関しても，特に誤りはないので，ワープロの活用に関しても，問題はないと思われる。取り上げる語句や問題となる事柄の部分に═══を入れるなどして工夫を凝らしている。この学生は，文法の知識も正確で，漢字変換の際の文節単位での入力方法もしっかりしているので，本人も苦労なく，楽しんで用いている様子である。

語釈７番で，彼は１つ大きな誤りを犯している。「茶づけ」についてであるが，例にあげてある「一夜づけ・みそづけ・氷づけ」でも分るように，茶で漬けた，漬けものの一種だと思い込んだようである。いかにも文法に興味があり，ある程度自信もある彼らしく，「お茶づけ」の「づけ」から，語義を類推したようである。

たしかに，３万～４万とも言う，現代日本語での文章表現に使用される語彙量に対して，現実に留学生たちが，それまでの日本語教育を通して身につけている語彙量は，その10分の１の３千程度に過ぎない。その膨大なギャップをうめるためにも，より効果的で体系的な，語彙拡大に向けての対策が必要である。その意味で，彼が，理解語彙をもとに，新出単語の語義を類推したのは，すばらしいことだったと評価できる。

しかし，残念ながら，日本語の語構成は，それほど完全に体系立ってはいない。彼の努力を十分に認めた上で，やはり例外の多いことに注意して，辞書で確かめることをすすめるべきだろう。中級から上級にかけて，テキスト用に語彙量が制限されて書かれている文章から離れて，一般の文章を読みこなさなければならない段階に入ると，飛躍的に増大する語彙に柔軟に対処して行く姿勢が要求される。既習の語彙をもとに，文脈との関連の中で，その都度単語をとらえて行く訓練と能力が要求されるのである。

指導者の側は，このような現実をしっかり認識した上で，熟語，複合語，慣用句，慣用表現などの，文脈の中での関連語句の提示を効果的に行っていく努力が必要であろう。

4　日本語Ⅲ

テキストは，「新要説文語文法」日栄社刊で，現在，日本国内の高校で，文語文法のテキストとして広く採用されているものを用いた。毎時，テキストの各課の終りについている練習問題と，指導者が補充用に準備した練習問題のプリントを仕上げるという手順で進めた。文法事項の解説を指導者がクラスですることはせず，もっぱら学習者が，テキストを用いて家庭で自学自習をすることを主にしている。かなり乱暴な方法であるが，受講生はすでに一応の文語文法知識を身につけており，又，高校のテキストが手許にあることを考慮した上で

のことである。

指導に立つべき筆者が，文語文法の指導経験がなく，また日本語教育の指導書でも古典学習を報告したものをみつけることができず，まさに暗中模索，手さぐりでの出発であった。

このような状況で始めたクラスであるが，授業は予想以上に好調である。というのも，まず第一に，留学生に文語文法の知識が，非常に豊富であることがあげられる。外国でよくここまでと思う程によく学習し，理解してきている。日本人のように，内容さえ分れば良いとする甘えがなく，文法を完全に覚えているせいもあろう。助動詞の接続なども，実に明快に説明する。

日本語Ⅲの受講生の大部分が，信州大学大学院人文科学研究科言語文化専攻を志望し，国語学専攻を希望していることもあり，その興味と熱意には指導者の予想を上回るものがあった。現代語も完全でないのに文語などと考えるのは間違いで，彼らにとっては，外国語学習の一環として，それ程の違和感はないように見える。解釈を目的として，かなりきちっと整理されている文語文法は，ある意味では，現代語よりも説明がつきやすいとも言えるだろう。日本人が手助け出来るのは，文法よりもむしろ日本的な考え方や生活習慣，季候，風俗などを含む，古文の常識といわれる方面においてであろう。

古文の学習を通して，指導者と学習者が，ともに，現代に通じる日本語の歴史的な変遷を探ることは，非常に興味深いことである。結果的に，これらの学習が，現代日本語への理解を一層深めることになり，ひいては，学習者の強い自信ともなって行くだろう。

古典学習を通して感じたことに，留学生１人１人に付いて学習指導の手助けをするチューターの役割の大きさがある。週１回，１こまの授業でできることは制限されているが，個々の学習者が，それぞれのチューターとともに種々の古典作品を読み進めている。「竹取物語」「徒然草」「方丈記」などである。そこでの学習の成果が，日本語Ⅲのクラスで発揮され，また，日本語Ⅲでの学習がチューターとの学習に生きるということである。留学生の日本語学習が，総合的に関連を持ちながら，大きく効果を上げている様子が実感できてうれしい。

日本人以上に正確で，上手な日本語を使う外国人も多い現在，日本人以上に，日本の古典にくわしい外国人研究者が輩出しても不思議はない。

日本語の語源や，音韻の歴史的変化に興味を持つ台湾からの留学生のレポートの一部を紹介する。

……橋本進吉著の「古代国語の音韻に就いて」や土井忠生著の「改定版日本語の歴史」などの本でも，現代日本語において「観音様」の「カン」という発音は，昔の国語では「クァン」だったと述べられている。だが，本当に昔は「カ」が「クァ」と発音されたのだろうか，読んだだけでは信じられなかった。

……方言調査に行った際に，おもいがけず，「お菓子」を「オクァシ」と，「息」を「エキ」と，発音するおじいさんに出会った。そして，「オクァシ」と聞いた時，最初は自分が聞き間違えたのかと疑わずにはいられなかった。それで，「もう一度，お願いします」と二，三回繰り返して頼んだ結果，やっぱり「オクァシ」だった。本当に「百聞は一見に如かず」だ。

従来の音韻変化が分れば，古典文の解読にも非常に役に立つと思う。例えば，「なり」の由来は，「にあり」〔niari〕の〔i〕が脱落して「なり」〔nari〕になることなどだ。丸暗記もせずに「なり」の由来が「にあり」だ，ということも楽に分かる。同様に，「一日」「朔」の由来は，「月立ち」

〔tsukitatʃi〕の〔k〕が脱落して現代日本語の「ついたち」〔tsuitatʃi〕になるのだ。このように一々例を挙げると，きりがないが，現代日本語の語彙の由来を理解するためには，まず従来の音韻の変化を理解することが必要だと思う。……

V　日本語教育と国語教育

学習者の質的違いから，日本語教育と国語教育が，その指導法において大きな違いがあることは，本論の中でも時々に十分に述べたつもりである。

ここで今一度，日本語の文法について考えてみたい。国語教育でそれを「国文法」と呼び，日本語教育では「日本語文法」（日本語文型）」と呼ぶ。が，呼称の違いはあるものの，実質は一つのものである。

日本に生まれ育ち，無意識のうちに身に付けた国語（日本語）を，長じて後，自らの言語を，客観的・意識的に整理・統合して，その体系をとらえようとする立場が国文法である。（最終的に体系がとらえられなくとも，日本語を話し，聞き，読み，書くことに何ら支障はない。）

一方，日本語文法は，日本語の発音も，文字も，文の組み立ても，何も知らない学習者に，学習事項を順次系統的に提出していくための確固とした基礎なのである。日本語文法なしには，日本語教育は一歩も進めないのである。この意味からも，日本語教師は，日本語の文法体系をしっかりと把握しておく必要がある。

文法説明をする，しないの問題ではなく，体系的把握と精確な認識に立った上で，学習事項を効果的に提出しなければならないということである。

理想論を言えば，指導者の体系的理解に基づき，時々に応じて合理的に提出された語彙・文型をもとに，学習者が無意識のうちに日本語学習を進め，最終的に，正しい日本語文法を身につけているということが望ましい。

しかし，現実問題は，全く逆の場合が非常に多い。というのは，留学生がテキストで覚えた文法をもとに日本語を運用する。そしてそれが自然な日本語であるかどうかを，日本人に確認するのである。日本人は，自らが無意識のうちに身につけた日本語力で，日本語らしさをうんぬんし，結局，どこが誤りなのかも，正確に，文法的に説明することはできないのである。

外国語として日本語を学習する日本語学習者には，文法はあくまで絶対的規範であり，それをおいて外に学習の手段がないのである。日本語教師は，外国語学習としての日本語学習であるという事実をしっかりと認識し，まだ解決されていない部分も含めて，日本語の文法を体系的に理解・認識する努力を怠ってはならない。

日本語が自由に使えるということと，日本語を教えられるということの違いを，しっかりと心に刻みたい。このことは，長年，曲りなりにも国語教育に身を置いてきた筆者が，日本語教育に携わってみて，深く身に染みたことである。

日本語教育は，日本語（国語）を無意識のうちに自由に操る我々日本人にとって，この上ない国語教育であることを実感している。国文法の姿勢はもちろん間違いではないが，日本語文法の立場で，さらに日本語を深く見極めることは，結果的に，日本語を世界に通用する，洗練された言語として確立することにつながるだろう。

日本語を研究対象とする全ての分野の研究成果が，日本語教育の場で，よりよく生かせるようになれば，すばらしいことである。世界の多くの国の人々が，日本及び日本語に興味を寄せる現実を，一日本人として謙虚に受け止めたいと思っている。

V おわりに

留学生の日本語教育は，単に日本語の指導に限られるものではない。留学生を取り巻くすべての環境が，うまくかみあってこそ，ことばの学習も，よりスムーズに進むものである。

国語学資料室が，文字通り参考文献利用の部屋であると同時に，ティールームとしての休息の場でもあり，かつまた，日本人教官及び学生との，日常的な交流の場であることを考えると，現在，人文学部，とりわけ国語学講座に所属する留学生は，日本語を学ぶ学生として，非常に恵まれた環境にあると言えるだろう。また，ここに助手としての立場の筆者が，その間の様々な橋渡しとして幾分なりとも役立っているとすれば，望外の喜びである。

今後も，人文学部の留学生が，恵まれた環境で，十二分に日本語の学習が行えることを期待している。

実情報告ということで，種々の問題を網羅的に書き連ねた。今後は，各部について整理し，さらに深く研究を進めるつもりである。

注

1 西ドイツからの留学生は，日本語専攻ではなく，日本語学習歴は，西ドイツ国内での2年間・1週2時間の日本語及び日本事情関係の授業と，来日直前に，前の留学先の米国内で受けた3か月間の日本語集中講座だけであった。

2 本論中の留学生の作文例は，指導者からの添削指導（個別面接指導を含む）を受けた後，書き直して，再提出した折のものである。

3 留学生の作文の公表の場として，適宜発行している。教官及び日本人学生からの寄稿も掲載し，人文学部内での交流の一助となることを願っている。

参考文献

北原保雄編 講座 日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体（上） 明治書院 平成元年
北原保雄 日本語の世界6 日本語の文法 中央公論社 昭和56年
早稲田大学語学教育研究所 講座 日本語教育 第17分冊 1981年 第18分冊 1982年 第21分冊 1985年
日本語教育学会 日本語教育 43号 1981年
国立国語研究所 日本語教育指導参考書7 中・上級の教授法 昭和55年
文化庁 日本語教育指導参考書1 音声と音声教育 昭和46年
文化庁 国語シリーズ別冊1 日本語と日本語教育 —語彙編— 昭和47年